

明石の史跡（４４）光触寺の太閤松



太閤松（大久保、光触寺に有り。太閤本陣の跡なり）

これは文化元年（1804）4月、大坂の書林（柏原屋清右衛門・柏原屋与左衛門・勝尾屋六兵衛・塩屋忠兵衛）が刊行した『播磨名所巡覧図会巻2』において、紹介された大久保地域の名所の一つである（『日本名所風俗図会』13. 69頁）。当時の光触寺（こうそくじ）内に松の古木があり、いつの頃からか、太閤本陣の跡という風説が定着し、『播磨名所巡覧図会』に収載されたものと考えられる。

天正5年（1577）10月23日、中国攻めの司令官として出京した秀吉は、山陽道を下り、途中、伊丹城主荒木村重が800余人を率いて先導し、播磨入国となる（武功夜話1. 436頁）。しかも光触寺門前を通るは太山寺道なのである。

翌6年（1578）3月からの三木合戦により、播磨とはゆかりの深い人物となる秀吉。しかしながら彼が光触寺に本陣を設置したという明証はない。

同4月18日、尼子勝久籠城する上月城に、吉川元春・小早川隆景を中心とする毛利勢が包囲攻撃をしかけた（萩藩閥閥録3. 465頁）。秀吉は信長に援軍を乞う。

5月1日、織田軍の播州出陣が発令された。総大将の織田信忠（信長嫡男）は、尾張・美濃・伊勢3国の軍勢を率いての出陣となった。その日は郡山（茨木市）に宿泊。翌2日は兵庫。「六日には播州の内明石の并大窪と云ふ在所に御陣を居えられ」（信長公記巻11）とあって大窪に駐屯したことがわかる。このとき先陣は、加古川近辺に野営したという。市内最大の瓦屋根を持つ光触寺本堂こそ、信忠本陣にふさわしいものであったろう。信忠は本能寺の変において、二条城にて父信長に殉じて歴史の舞台から消え去る。のち天下人となった秀吉に、歴史事実が仮託されたのであろう（今日、その切り株は「太閤腰掛松」として保存されている）。



光触寺松